



共生社会に必要なのは…

物事を見る視点は多様であると気づくことから



動くピクトグラム

東京2020オリンピック・パラリンピックが閉幕しました。コロナ禍での開催でしたが、選手たちの躍動感溢れる姿、己の限界を決めずにひたむきに鍛錬してきた姿に、心揺さぶられたことと思います。

さて、オリンピックの開会式で大反響だった、動くピクトグラム。次々と三人が作り出す、全競技五十種目の動くピクトグラムは、世界的に話題になりました。たった五分しかないのに、全競技を表現することは、至難の業です。けれども、演出を手がけたHIDEO YONZさんは、なんとともライブで全競技表現する意思が固かったそうです。『誰か(選手)のために自分ができることを考えて、一生懸命努力することが、必ず誰かのためにつながる』のだと彼らのパフォーマンスから感じました。



ピクトグラムは日本発祥

日常で目にするトイレや非常口のマーク、あれもピクトグラムです。ピクトグラムとは、何らかの情報や注意を示すために表示される視覚記号の一つで、一般的には絵文字と呼ばれています。絵文字のため、言語に制限(左右)されずに内容の伝達を直感的に行うことができます。

現在目にしているピクトグラムの形が世に広まったのは、一九六四年以降で、そのきっかけは日本で開かれた東京オリンピックだそう。当時の日本人の英語力では、日本にきた外国人と十分なコミュニケーションをとれる状態ではないと考え、『誰が見ても分かるマークを作ろう』とオリンピック競技種目や食堂などのマークが作られました。制作デザイナー達は「このマークは社会に還元すべき」と著作権を主張しなかったため、世界中に発信されていったのです。

求められる共生社会

ピクトグラムは視覚で瞬時に判断できるものです。だったら、

視覚に障害がある人はどうなるのでしょうか。すると、こんな記事を見つけました。

鹿児島県視聴覚障害情報センターが七十三種目の点字ピクトグラムを作成し、現在インターネット図書館「サピエ」で公開されている。ダウンロードして利用し、点図にふれた視覚障害者は「初めてどんな競技がイメージできた」と喜んでる。

(毎日新聞令和2年1月3日掲載)

共生社会をめざす具体的事例や作品を目にすると、とても温かい気持ちになります。オリンピック番組、NHK『#みんなでハイライト』でも、心が温かくなる場面がありました。V6の三宅さんと三人のゲストで、熱戦の模様や選手の活躍を紹介するのですが、丁寧な副音声解説とびつたりな字幕、そして手話を交えることで、障がいがある人もない人も一緒に楽しめるユニバーサル放送でした。視覚障がいがある早瀬さんが「体操の床種目は音楽が鳴っているのか」という質問に、「女子はあ

るけど男子はないよ」と答える三宅さん。ゲストのバービーさんは、「私も初めて(男子との違いを)知りました」と会話を弾ませていました。いろんな人が、それぞれの視点でオリンピックの会話をする中で、当たり前のように思っていたことや、気に留めなかったことに、初めて気づかされるのだなと感じました。

今、世界は共生社会に向かっています。共生社会は大人も子どもも、男も女も、障がいの有無も、国籍などもひっくるめて、一人の人間として違いを認め合いながら生きていく社会です。

国際パラリンピック委員会も、パラリンピックの最大の目標は、「障がい者に対する社会の見方を変えることだ」と提唱しています。

私たちが大切にしなければいけないのは、生活環境や制度、日々の会話において、物事を見る視点は多様であることを知り、それぞれの視点から語り、想いを共有することではないでしょうか。このことは、よりよい社会へと一歩前進するとともに、人を真に大切にすることにつながっていると考えます。